



「嵐ヶ鼻（嘴）土手」とも呼ばれる安長土手は、平安末期から鎌倉初期にかけて千代川と野坂川の氾濫から集落や耕地を守るために築かれた堤防といわれています。元々は1500メートル位あったようですが、現在は東西方向の700メートルが残っています。ところで、寛文10年（1670）に鳥取藩が作成した絵図「寛文の大図」に描かれた土手を現在の地図で見比べてみると、恐らく世紀小学校辺りまであったのではないかと思います。

この安長土手のある安長地域は千代川下流の西岸、野坂川の北部に位置します。近世以前、野坂川は安長集落のすぐ南側を流れて千代川に注いでいたため、野坂川の氾濫をまともに蒙っていました。人々は千代水一帯も含めた広い地域を守るために輪中堤を築いていき、徳吉の微高地へ伸ばしていきました。これが安長土手で中世の頃のことでしょうか。

この後、近世初頭に鹿野城主となった亀井茲矩は、千代川左岸に「亀井堤」と呼ばれる堤防を築くとともに、野坂川を現在の千代大橋付近で千代川に合流するように付け替えました。この治水事業によって安長土手は従来の役割から、大洪水の時のみ役割を果たす副堤としての機能をまかされました。このため、不要となった土手は除かれ耕地化していったように思われます。

今や、堤防の機能はなくなった安長堤防ですが、当初堤防強化のために植えられた雑木が、長年のうちに自然状態となり、タブノキ、ヤブツバキ、ヤブニッケイなどの常緑樹のなかに、ムクノキ、エノキなどの落葉樹が混交する現在の林相を見せています。日差しを避けて樹木林の中を歩くと、木の実をついばむヒヨドリにまぎれ、ウグイスの鳴き声も聞こえてきます。散策コースとして周辺住民の憩いの場であるとともに、平地においてこのような樹林は極めて稀な存在であるため、鳥取市では安長堤防林を保存樹木として守っています。

■位置図



安長土手
古代から中世にかけて、安長の集落や耕地を守るために築かれた土手は、今ではタブノキ、ヤブツバキなどの常緑樹にムクノキ、エノキなどの落葉樹が混交する。



土手の中ほどにある秋葉神社。



東門寺境内（駐車場）より千代川に伸びる安長土手
当初は堤防強化のため、手近な雑木などが植えられたと推定されるが、時を経て自然状態となり常緑樹が混交する林相となった。社寺林以外でこうした平地の樹林は稀な存在。



東門寺より鳥取南バイパスに向けて伸びる安長土手